

世界歩いた楽器集めた

岩倉市八軒町にある、松橋楽器資料館は、サラリーマンだった松橋靖和さん(73)が、妻の美智枝さん(66)と運営している民族楽器の博物館だ。開設してから20年目。世界各地を歩いて集めた收藏品はさつと2300点になる。収集意欲は衰えを知らず、殿堂のコレクションは増える一方だ。(佐藤雄二)

「10年ほどは中南米はかりだった。去年は久しぶりに中国を回ってきました」。福建省の客家の集落では目を引く楽器に出会えず、安徽省の景勝地・黄山に近い町から石笛4本を持ち帰った。

電電公社(現NTT)の職員だったころから、津軽三味線の

技量を見込まれ、海外外交事業にはしばしば参加していた。中国で津軽三味線の歴史を聞かれて返答に困り、そのときの恥ずかしい思いが、その後、30年余に及ぶ楽器研究と収集のきっかけになった。

現地を訪れ、楽器を使っている人たちと交流し、そのうえで



中国楽器コーナーと松橋靖和さん＝岩倉市八軒町

私設博物館で演奏会も

買入れたたり譲り受けたり。1992年4月、中途退職して資料館を開いた当時は約800点だったのが、今では館外に倉庫を確保して保存するほどの数になった。

展示室には、名古屋で開発された大正琴の1号機や、現地でも姿を消したとされるインド・ベンガル地方の鼓楽器「ドンドロ」やテマリ局から貸し出し依頼が来る貴重な楽器がずらりと並び、南米アマゾン川の奥地からリコプターで搬出した大きな木製打楽器、中国の農村で軒先にこらがっているのを見つけた古代の青銅製打楽器……一つひとつに思いが出が詰まっている。

末路の地は南極大陸ぐらいなのだが、「まだまだです。ピアノやバイオリンやギターを見たこともないまま、独自の楽器を先祖代々使い続けている地域が世界にはたくさんあります。この上の目標は「タジキスタン」と探検への意欲を示す。

探訪旅行中に知り合った演奏家を館に招き、多いときは年に5回ほど、民族楽器コンサートを開いている。問い合わせは同館(0587・37・5100)へ。

◇ 23日午後1時半から、一宮市の民間市民講座「いちのみや大学」が、松橋さんの解説や収集寓話を聞く集いを同館で開く。会費千円(入館料込み)。問い合わせは同大学事務局(0587・72・5445)へ。